

論争

「耐えがたいほど正義に反する」社会
映画『袴田巖 夢の間の世の中』をみて

三谷誠

(みたに まこと・68歳、団体職員)

いわゆる袴田事件で冤罪死刑囚となり、一昨年3月、逮捕から48年ぶりに釈放された袴田巖はかまだいわたおさんの近況を追った映画『袴田巖 夢の間の世の中』(金聖雄監督)を観た。

袴田事件とは、1966年に静岡県清水市(現・静岡市清水区)にあった袴田さん勤務先の味噌製造工場で起きた、一家4人を殺害した強盗殺人・放火等の事件である。

当時30歳の袴田さんは元プロボクサーだったことから、警察に「ボクサーくずれ」として目を付けられ、取調室に便器を持ち込まれるなどの過酷な取り調べで、逮捕後20日目に自供させられてしまう。その間の累計取り調べ時間は警察・検察の提出資料によっても237時間に及ぶ。

しかし、後から発見された犯行時着衣やその他の証拠物は弁護団の実証実験などにより、むしろ袴田さんの犯行を否定するものとなった。弁護団に加わっておられた最晩年の安倍治夫氏(元検事)の車イスからの訴えは、強く印象に残っている。

再審を求める支援組織は複数あり、多くの現・元プロボクサーも加わっていた。著作や映画、演劇をはじめ多くの資料からも袴田さんの無実はゆるぎないものに思えた。一審で心ならずも死刑判決を書いてしまったという一人の裁判官は、公の場で袴田さんに謝罪している。しかし再審の扉はなかなか開かず、袴田さんは精神を病み、姉の秀子さんとの面会も叶わなくなってしまうていた。

このような中、2014年に第二次再審請求が認められ、死刑が確定してから34年目に刑の中断となり、袴田さんは釈放された。78歳になっ

ていた。釈放時おぼつかない足どりであった袴田さんは入院し、姉の秀子さんの介助のもと元気を回復され顔に精気が戻ったということだが、金監督からこの映画の感想を求められ「この映画はウソなんだ。わしゃあんなによぼよぼじゃねえんだ」と言っただけという。地獄から生還した浦島太郎のようである。48年間はあまりにも長すぎた。

袴田さんは死刑確定4年後、カトリックの洗礼を受けている。著書の獄中書簡集『主よ、いつまでですか』には、信仰を深めておられたことが

窺うかがえる。しかし、その後自らを「全能の神」のように言い、事件があったことも否定するようになった。

このことは、死刑が命を奪う前に精神をも蝕むしばむ残酷な刑だということを示しているが、袴田さんは強靱きやうじんな精神力によって自ら神を創造し、その神に憑依ひきよすることによって生き延びた、ということなのかもしれない。

まさに奇跡的な生還である。再審決定文には「袴田さんをこれ以上拘留することは耐えがたいほど正義に反する」とあった。だが、検察の即時抗告で再審公判はまだ開かれず、袴田さんは死刑囚のまま、「耐えがたいほど正義に反する」状態であることに変わりない。そのことを映画は静かに訴えている。